

の畜生道に入りにけるにや、あはれなる事なり。

〔東大寺造立供養記〕抑天下亂逆當初、平大臣宗盛之牛、自然出來也、形體殊好、勢力無雙也、或引樹木、或叶雜事實是牛王也、非普通牛、又有貴德也、瘧病者祈禱其牛、即得平愈、經十有餘年之後斃矣、爲之築墓立卒都婆、以其皮張大鼓、云生時、云死皮、○後誤旁叶寺用也。

〔西遊記續編〕牛合うしあわせ

薩摩鹿野谷といふ所には、牛合といふ遊びあり、上方の鷄合せのごとし、牛を雙方より出して戦はしめて見物する事なり、甚だ猛勢なるものなり、よくつき合ふものとぞ、もし退ぞ、かすして難義に及ぶ時は、竹箒を其中に入るれば、忽ち左右へわかれ離る、外のものにて分んとすれば、いよいよ勢ひ付き、多く疵付死する事もあり、斯猛勢なるものといへども、唯眼を用心する事甚だし、竹箒の和らかなるが、目のあたりにさへぎれば、方業にあらそひがたく引退くとぞ、是も上方には珍らしき遊びなり、唐土には闘牛とて牛を突合せて遊ぶ事見へたり、唐近き國なれば其風なりけらし。

〔南總里見八犬傳〕第七十三回仇を謬て奈四郎頭顱を誇る

次圍太歡びて、扇を笏に物々しく、うち呴きつゝ講ずらく、抑越後州古志郡なる二十村は、東山邊の總名にて實は二十六村あり、そが屬村を相加えて、細かにこれを數れば、五十个村にも及ぶとなん。然れば這二十村なる荒屋、逃入、虛木の三個村、合保の鎮守の神を、十二大權現と齋稱へて、各その村落に神社あり、この神の祭祀と倡へて、年の三月四月の間、宿雪の消果る遲速によりて、定日なく、又定りたる地所もあらねど、大約寅か申の日に當る吉日を卜定めて、里人闘牛を興行す、これを地方の俚語に牛の角突と呼倣したり、この事いづれのおん時より、當郡にのみあることやらん、昔より今に至て、こゝに斷絶あらずといへども、よくその始をいふものなし、○中然程